宮崎兄弟資料館だより

第12号　2021/3/31

宮崎兄弟資料館における新型コロナウイルスの感染拡大の影響

2020年初めから日本でも感染が拡大した新型コロナウイルス。日常生活はもちろん、各業界にも大きな打撃を与えたこの感染症の影響は宮崎兄弟資料館にも及びました。令和2年度には、毎年恒例の牡丹茶会、いけばな展はもちろん、音と光の祭典、日中友好促進会議の設立40周年記念イベントの会場ともなる予定でしたが、緊急事態宣言発令に始まり以降も断続的に感染拡大が起こったため、開催を断念せざるをえませんでした。

宮崎兄弟の生家は、宮崎兄弟の顕彰だけでなく、地域における伝統文化の継承と国際交流の拠点という場にもなっており、令和3年度に向けて現在準備を進めています。感染状況をみながら、可能な限り事業を行っていく予定ですので、今後も宮崎兄弟資料館公式ホームページを御覧いただきますようお願いします。

2020年12月、茅葺屋根を含む日本の伝統建築技術がユネスコ世界文化遺産に！

▲今では担い手が少なくなっている茅葺屋根の技術。日本の環境に適し長く受け継がれてきた技術が世界的に価値あるものと認められた。

2020年12月17日、日本に新たなユネスコ無形文化遺産が誕生しました。その名は、**「伝統建築工匠の技ー木造建造物を受け継ぐための伝統技術」**。日本の伝統建築技術は日本の自然環境に適応したもので、自然との共生や循環型社会といった背景の中で育まれ発達してきました。

宮崎兄弟の生家を特徴づける「茅葺屋根」も、今回選ばれた技術の一つです。茅葺屋根は断熱性・保温性・雨仕舞・通気性・吸音性を兼ね備えた優れた屋根で、古くは縄文時代頃から使われてきたと考えられています。

宮崎兄弟の生家で茅葺屋根の総葺替を行ったのは平成27年。今後も、補強のための「差茅（さしがや）」等、定期的に見直し補修を行うことで、伝統建築技術の保存と継承に貢献していきたいと考えています。

生家だより　Ｎｏ．１２

・9/27（土）　オンラインツアー収録

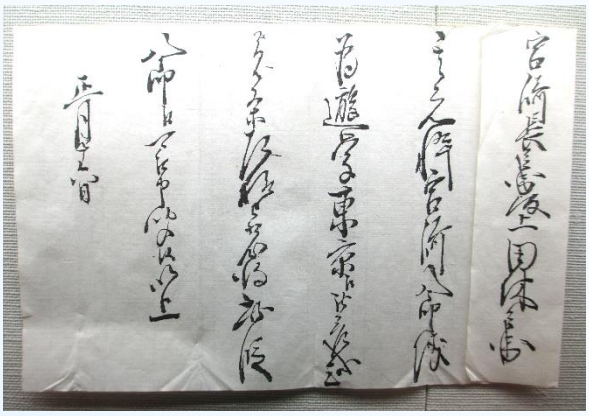
新型コロナウイルス収束後に向けたインバウンド観光事業の一環として、中国人訪日客を主なターゲットにしたオンラインツアーを開催しました。当日はTikTokでライブ配信。旅行会社を中心に約3,000人が視聴されました。

▲冒頭には市長、マジャッキーも出演！

資料紹介⑪

長兵衛宛て上田休兵衛達し
（1870（明治3）年1月16日）

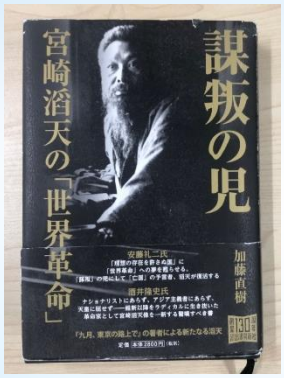
当時の玉名郡代である上田休兵衛から八郎の父・長兵衛（長蔵）に宛てた書。この一週間後に出された東京遊学の達し「其元倅宮崎八郎。東京遊学被仰付候ニ付、明後廿五日爰許被差立旨の条左様被相心得、此段八郎え可被申聞候。以上」の内示であり、洋学を学ぶようにと伝えられている。八郎は内示から9日後の25日には荒尾を出立し、大阪・京都での宿泊を経て3月3日に東京龍口にあった熊本藩上屋敷に到着している。



書籍紹介④

加藤直樹
『謀叛の児　宮崎滔天の「世界革命」』
（2017年、河出書房新社）

宮崎滔天をただ「義侠の人」という評価ではなく、理念の人として彼の「射程の長い思想」を生涯を辿りながら紹介した一書。「射程の長い」というのは、近代をめぐる歴史認識の問題等を念頭に、滔天が書き綴った文書が「まるで二十一世紀の私たちに向けて投げかけられているかのよう」であることによる。「私たちが東アジアと日本というテーマで思索する時、同じテーマで悩み、模索した」「百年前の友人として今も対話すべき人物」として、滔天の思想性に光を当て、「独自の深い思索によって日本と中国、世界の行方を見つめ続けた人物」と評価している。



宮崎兄弟の生家スケジュール（令和3年度）

・牡丹茶会（4月11日、お呈茶：荒尾海陽中学校　茶道部）

※3月末～4月上旬頃、牡丹開花

・初夏のいけばな展（5月22～23日）

※5月末～6月頭　菩提樹開花

※お盆開館（8月10日）

・音と光の祭典、荒尾市日中友好促進会議設立40周年記念イベント（9月26日）

・JR九州ウォーキング（11月3日）

・滔天忌俳句大会（12月6日）

・企画展「荒尾市・シンガポール青少年国際交流推進事業　成果報告」（1～3月末）

・文化財防火デー「防火訓練」（1月26日）

※イベント詳細は宮崎兄弟資料館HPをご覧ください。

※開花時期については、前後することがございます。詳細については荒尾市文化企画課（☎0968-63-1274）までお問合せください。

～次号予告～
次回の「宮崎兄弟資料館・館報」13号は、**2022（令和4）年3月**に発行予定です。
内容は、
（1）生家だより　No.13
（2）資料紹介⑫
（3）書籍紹介⑤
を予定しております。その他、掲載内容についてご意見・ご要望があれば、下記メールアドレスまでお寄せください。
E-mail：culture@city.arao.lg.jp（荒尾市文化企画課 世界遺産・文化交流室）

～編集後記～

新型コロナウイルス感染拡大の報道の中で耳にした方もおられるかと思いますが、今からおよそ100年前、いわゆる「スペイン風邪」が世界中で流行しました。日本でも多くの感染者が出る中、当時、滔天は東京で晩年を過ごしていました。「出鱈目日記」の中で滔天は「世界風邪」として東京で毎日250人ほどの死者が出て火葬が間に合わず死体が積み上げられていること等、その悲惨さを伝えています。それから100年が経過した今日…流行から約1年でワクチン開発が進む等、科学は進歩し感染症対策等のスピードは上がったのではないかと思われますが、それでもこの1年はこれまでの生活の見直しを迫るような大きな変化の年でした。

今の時代を滔天が見たら何と言うでしょうか。今年は滔天生誕150年の年でもあります。何度失敗しても諦めず活動をつづけた彼に100年後の私たちが負けぬよう新たな方法等を検討し、顕彰事業を着実に行っていきたいと思います。